
黄昏をとどめて

溝部 成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏をどじめて

【Zコード】

Z6875Y

【作者名】

溝部 成

【あらすじ】

「君と僕の好きは、違うすぎるよ」

内憂外患により崩壊しつつある帝国。

かつて国首と呼ばれ、繁栄を謳歌した青家一族の末娘エンジュは、西部戦役の和約のあかしとして、西家の公子ソウセツと婚約し、辺境へ向かう。

年も育つた環境も大きく違う相手に、戸惑うが…。

一方、皇宮では皇位継承をめぐる対立から、大きく政局が動いていた。

空を大鳥が旋回している。

遠く、幟がいくつも翻る城塞。見渡す荒野。

草はほとんどなく、遠い地平まで赤い土に埋め尽くされている。

曇天だ。雲が厚く立ちこめる。

激しく風が吹きつけ、吹雪のような音を立てた。人の泣き声のようにも聞こえる。

砦は鉄の厳めしい大門で固く閉じられ、見張りが壁に等間隔に配置されている。

戦場だ。

「お前はここで補給の指揮を」

大柄な体を曲げるようにして、男は狭い戸口で振り返った。堂々とした体躯の青年だ。

ずいぶん士にまみれてはいたが、彼がまとっているのは紛れもなく絹の白い軍装で、左手には大ぶりの実用的な刀剣をもっている。唯一の装飾品は額飾りで、白銀の複雑な紋がぬいとられ、中央には涙型の大粒真珠が揺れている。

白は、西家の色だ。

「いいな？」

大らかで人をひきつける笑顔で彼は言った。
外では鬨の声が上がる。

むき出しの石壁に、西からの陽が、うすく光をさし入れる。

「なぜ。…厭だ、わたしも連れて行け」

木の椅子に座つた別の青年が、頑はない子どものように首を振つ

た。

彼の前には部屋の大部分を占める卓が置かれ、書きかけと思しき書類と筆が転がっていた。

振り返った青年とは同年代、そして口調から同輩に見えるが、彼には行軍の将校らしい様相がまったく感じられない。

略式の軍装を身につけはしているが剣は佩かず、長く伸ばした髪を白と赤の組みひもで結わえている。

白い服にも殆ど汚れらしきものは見当たらぬ。そして軍人としては、纖細な面。

その顔は今は怒りで、上氣している。

出て行こうとしていた青年が、苦笑した。

「もう決めんだ、お前はここに残す」

狭い部屋には2人しかいない。

石の壁に沈黙が落ち、兵士たちの士気の昂りが木製の床を通して伝わってくる。

剣を入り口に立てかけ、自分を睨む青年の前までくると、卓上の紙をとりあげて目を走らせた。

口笛をふく。

完璧だな、彼の口がそう動いた。

その行為に、座つたままの青年の眉間に皺がよる。目には剣呑な光がともつた。

「サイカ、わたしの話を聞け」

しかし、サイカと呼ばれた青年は口元に笑みをたたえている。

「おう、でもまず俺の話からだ」

彼は片手を挙げて制止すると、早口に語つた。

「総指揮権は叔父上にゆずつた。俺が連れていくのは、4隊。お前

は居残り」

「だから、なんでわたしがここにいなければならぬ、」

「お前が俺の副官だから」

「だったら、なおのこと」

しかし、サイカの意思は変わらなかつた。

立ち上がるうとする相手をじやれるように椅子に押しとどめ、紙をひらひら振る。

「急襲が俺の担当なら、これはお前の担当」

「まくいつたら、な。

軽口だったが、その言葉に青年は押し黙つた。

薄暗い室の中では、紙の内容も彼の表情もはつきりとは読み取れない。

どうやら、サイカの言葉をしぶしぶ受け入れたらしく、大きなため息を聞かせて、青年は椅子から静かに立ち上がつた。

「吾が友に武運を。勝ちて帰れ」

勝ちて、帰れ。

古くから繰り返されてきた戦士への餞の言葉を、口にする。

「我らの風に、勝利を」

サイカはそう返すと、相手の肩を軽く抱き、部屋をあとにした。

荒野のその地平線。

鉄の鎧で覆われた軍馬が、横列にずらりと並んでいるのが見えた。鈍いてい鉄と、盾を打ち鳴らす音。その数、十万。強い風が、耳元でこうこうと鳴り響く。騎士たちが身につける鎧は鉛色に輝き、兜は十字に切りこみが入れられている。グルジム力の騎馬の軍勢だ。大陸最強と呼ばれる騎馬軍。帝国の西部をおびやかす敵。

大門の前でサイカは合図をして、馬にまたがった。砦の上に、軍旗がひるがえる。幾度も洗いをかけた白。

今日は、戻つてこられるだろ？
サイカは、弱気な自分を嗤うように一度、目を閉じた。
この作戦は、誰が見ても無謀だ。
だが、退路はない。

年若い騎士たちが緊張した面持ちで、彼の号令を待っている。グルジム力の軍はここからは見えない。鋼鉄の軍団に対して、彼らは胸当てと盾で武装しているものの顔をさらしていく、いかにも無防備に見える。

騎士たちが風を呼ぶ祈りの声が耳を過ぎる。
耳慣れた言葉。
武運を願うまじないだ。
西家の部隊の真ん中で、サイカは息をついた。

「若、ソウセツ様は」

老騎士が先頭のサイカの横に馬をつける。

白いあごひげを加えた武人で、彼の剣の師でもあった。タカサキといふ。

「あいつは、置いてきた」

「それはそれは」

サイカの簡潔な返事に、タカサキは声を立てて笑った。

戦場での気負いもない、朗らかな声。

サイカも歴戦の老将に軽口で答える。

「ソウセツに何かあれば、羽鳥が泣く」^{ハトリ} 目線を前へ戻して、続ける。

「敵は怖くないが、妹は怖い」

サイカの周りでひとつ、にぎやかに笑い声が上がった。
行軍を共にした騎士たちだ。

「いよいよですな」

タカサキが揚々と言う。サイカは静かだが、強く頷いた。

「ああ、エテを得て還るぞ」

敵領にある交易都市をあげる。

この西部国境は、隣国グルジムカの侵攻を受け続けている。

戦線は一進一退を繰り返し、特に打つ手もない。

「今こそ、徹底的な打撃を」とえて、蛮族を追い払う。雪が来る前に

巨大な領土や豊かな資源を誇るグルジムカと、この弱小の帝国とは、根本的に持久力が違う。

総力戦ともなれば、長くは保つまい。

グルジムカと半島で隣接した西部地域が一番多くの犠牲を払うで

あらう」とは、簡明な事実だ。

そのまえに。

そうなる前に、敵を大きく叩いておかねばならない。
サイカの聲音は、焦りと氣負いさえ孕んでいる。

「勝つて帰る」

「御意」

「必ずだ」

「いくぞ」

短い掛け声とともに、サイカは馬を走らせた。彼に従う4隊も遅れじと騎首を返す。

100名足らずの奇襲隊。

機動性にすぐれた、年若い騎士たちで構成された臨時の部隊だ。

陽が落ちてから、2隊を本當にぶつけ、その残りで敵軍の裏をかく。

それが、彼らに課された任務だ。

砦に残った叔父とは最後まで相容れなかつた。

「せいぜい、グルジム力の大軍におびえているがいいぞ」「かける陽を追うよつに、馬を走らせながら、サイカは口の中であぶやいた。

北の星が、白く輝き始めるのが合図だつた。

馬のいななき。嵐のような怒号。

整然と並んだ鉄の甲冑の右軍へ、急襲がかけられる。

白い軍勢の中心でサイカが、刀身を頭上に掲げて叫ぶ。

「大地を血で染めよ！我らの風を呼べ！勝利を！…」

圧倒的な大地の震動と、舞い上がる砂塵。

血しぶきと、周りで上がる悲鳴。引きずられそうになる、生々しい戦場の様相。

彼は、集団の陣形を解き、果敢に敵の中へ馬を走らせていく。

相手のふるいかぶつた剣を見事な綱さばきでかわし、踵を返す。

そのまま相手の喉へ刀を突き出す。血が彼の顔を染める。

息つく間もなく、後方からも敵が刀を振るつてくる。サイカは渾身の力で相手を突き返し、軍馬に剣を突きたてた。

馬の悲鳴。棒立ちになつた馬から相手は勢いよく投げ出され、その期を逃さず、彼は短刀を相手の喉元に正確に突きたてた。

サイカはほう、とため息をつき乗馬したまま屈みこみ短刀を抜き取ると髪をかきあげ、口元についた血をなめた。

「おのれ、白い幽鬼め！」

大陸西方訛りの罵りが聞こえ、横手から彼のもとへ斬り込んでくる。

強い怒りとともに繰り出された刀は重く、打ち合いは数度続く。

しかし、サイカの剣の腕の方が優れて速く、相手は喉元に刃を受けて馬から滑り落ちた。

サイカは肩で息をつくと、血に濡れた刀を振った。
そのときだつた。

背後から風をうなるような音が響き、強い衝撃とともに振りかえ
る間もなく、どうつと矢が突き刺さつた。

サイカはその勢いのまま、馬から滑り落ち、前に倒れるように両手を地面につく。

赤い砂煙と、周りの怒号が一瞬、止んだ。

衝撃に痛みが加わる。

背がもえる。

燃えるよつに熱い。

は、と彼は声を出すよつに息を吸つた。

吐き出す息とともに、口から鮮血が溢れる。

とつさにサイカは口元を押されたが、次に吸つた息はすぐに咳にかわつた。

まだ、…まだだ。

まだ、終わつていない。

苦しい息の中で、彼は胸元から白い布を引っ張りだした。

明らかに武人の持ち物ではない、纖細な布地。ハンカチだ。銀糸で花の刺繡が縫いとられている。その、ひと針ひと針を確認するよう

うに彼は指先で撫で、口元におしあてた。

「羽鳥…」

約束が、という言葉を風が拾う。

タカサキが、叫び声をあげながら、馬を走らせてくるのが田に入つた。

ああ、すまない…彼は胸をつかれるような痛みとともに、暗闇に身をゆだねた。

誰かが呼んでいるような気がした。

蠅燭のほのおが揺れる音がし、エンジュはまつと皿を開く。どうやら、うたた寝をしていたらしい。

幾度かまばたきをすると、徐々に意識がはつきりとして、頭の後ろが重く痛んだ。

開いたままの分厚い装丁の本を閉じると、エンジュは机に突つ伏した。

「エンジュ様、エンジュ」

その声で、もう一度彼女は我に返った。

「なあに、」

あわてて手すりに寄つて、階下をのぞく。「ウヒだ。

「もうすぐ終わります。いつもつき合わせて、『めんなさいね』『ウヒは、』彼女が寝ていたことを見抜いたらしい。しかしを見上げる顔は微苦笑を浮かべている。

エンジュはきまり悪くなつて、机の本を脇にかかえると、古びたはしじを細心の注意を払つて降りた。

分厚い硝子の天窓からは薄く光がさしこみ、はしじは一段を踏むことにきしきししなり、埃が舞う。

エンジュは最後の段から石床におりると、まつと息をついた。確認するまでもなく、年月と湿気によつて、はしじは根元から腐りつつあった。

それだけではない。

石床は、一部が隆起、陥没し、土が見えている部分もある。

「もう上にあがるのは、およしくださいな」「あなたがケガしないかと、ひやひやします。

「ウヒは心配顔で、ため息をついた。

「でも、上の棚にしか物語が置いてないのだから、エングジューは、にっこり笑つて手に持つた本を見せた。

孤独な竜と美しき姫巫女の恋物語である。

この国の者なら、幼い頃に一度は寝物語に聞いたことがあるだろう。誰でも知っているおどぎ話だ。

「あら『竜と姫君』。懐かしいわ。そんなのも、ここにありますね」

装丁の美しい表紙をのぞきこんで、感心したように「ウヒは言へ。エンジューは、曖昧にほほ笑んだ。

これは、ただのおどぎ話ではないかもしれない、そうウヒに聞いたから、なぜか喉の奥に言葉がつかえた。

裏表紙には、英秀王エイシュウウの御世の年号が刻まれていたが、作者の記名はなかつた。

今から250年も昔に書かれた本だ。

段の上の史書に紛れるようにして、置かれていたのを見つけたのだ。

ぱらぱらとめくつただけだが、乳母たちに聞いた物語よりよっぽど詳しく書かれているようだ。

ぼんやりとそんな物思いにふけつていると、ウヒが嬉しそうに話を継いだ。

「ここには本当に、さまざまな文献があつて、素晴らしいですわ」勿論、ここには重要な外交文書やいにしえの法令、史書が眠つている。

「ウヒと禁を破つて入つた、青家の古文書庫なのだから。

ここに置いてあるのは、大半が原本であり、重要な法文書である。ただし、その多くは虫にくわれ、黒におかれ、判読することも難しい。

青家が有り余る富を支配していた頃、いや、『国首の君』と呼ばれ権勢に酔つたころには既に、法書など見向きもされなくなつていたに違いない。

風雨にさらされ、朽ちるにまかせた古い禁書庫など、訪れる者とてない。

ある日エンジュが割れ窓から書庫への出入りを見つけたことと、彼女の家庭教師であるコウヒが学院で歴史を専攻していたことは、偶然だったと言えよう。

エンジュはコウヒと、書架に文献を並べ直しながら、机いっぽいに散らされたメモに目をやつた。

書きなぐりの省略記号ばかりで、エンジュには意味が分からぬながらも、じつやうり収穫があつたらしくことは、コウヒの表情で分かる。

「今日は何を調べていたの？」

「貿易の收支報告です」

280年前の交易の様相にはまだほど遠いですが、ヒコウヒは語つた。

彼女は、最高学府である国学院に籍をおいている。

『専門化はよろしくない。よい研究者というのは、満天下のあらゆる歴史事象に対応できなければならぬ』

師である高名な歴史家ジケイは、つねづね政治的、外交的、制度的、叙述的な出来事記述の歴史を否定しているのだといふ。

弟子であるコウヒたちにも、それは求められている。

未来志向の歴史学を推進することを。

彼女が選んだのは、縦糸に鎮国といつて貿易の転換期を、横糸に人物をとるという手法だった。

「どれくらい進んだ？」

「6頁、といったところです」

読み進めている文書は、古語で書かれており、なかなか思うようには進まない。

コウヒは先は長い、とばかりに肩をすくめた。

エンジュは、微笑をもらしてしまってそうになり、とつと吐息にかえた。

「ウヒが青家にいるのは、研究のためだ。ここには当時の外交文書が山のように残っている。

エンジュの父が寄宿を認める代わりに、彼女に提案したのは、末娘の家庭教師をすることだった。

「ずっと居てくれればいいのこ」

「何か言いましたか？ エンジュ様」

「いいえ、何も」

とつさにエンジュは首を振る。うつかり本音を聞かれてしまつとこうだつた。

取り繕つよつて、重くて破損しやすい書物を本棚に戻す作業に、気持ちを切り替える。

そのときだつた。

耳元で風が髪をふわり、ともちあげる気配がした。

さわさわと木々がざわめくのが、割れた窓越しに見える。

『…でいるわ…はやく…もどりなきや…』

さわやくよくな、笑い声のよつな、軽やかな声が聞こえる。風の知らせだ。

エンジュは外に視線を向けた。

遠くに、回廊を早足でゆく侍女たちが見えた。エンジュを探しているに違いない。

「戻りましょか、」

「ウヒも理解したらしい。荷物を手早くまとめる、内鍵を開け

て書庫の外へ出た。

彼女が出たことを確認してから、エンジュは内側から鍵をかけ直す。そして割れた窓辺から、外へ出た。

入るときは、この手順が反対になる。

ここは禁じられた書庫である。鍵のありかをエンジュは知らない。年齢より小柄で瘦せているエンジュには、窓からの侵入が可能だが、「ウヒはそうはいかないのである。

出るときに窓枠で、首と足をひっかけ、いつまでこれが可能なのか、エンジュは物語を胸に抱きかかえながら、自問自答した。

「姫、どうしておこででしたか」

空気を張るような、凛とした声が響いた。

エンジュは慌てて本を閉じ、振り返る。

まなじりをつら上げて立っているのは、彼女の教育係であるオノセだ。

白いかんばせ。一部の隙もなく髪を結いあげ、流行りの形に複雑に結ばれたえび茶色の腰帯。いつも通り、完璧な装い。

「どうも」

エンジュはそっけなく答えた。

「わたくしが何度も申しあげていますよ」、アリス

あとの言葉を引き取って、エンジュは続けた。

「父君のこの邸で、外をうろついた歩き回つてはならない、でしょ？」

「どうでも、どうぞいます。御身に危険が及ばぬようになりますのが、わたくしのつとめ」
 「退屈な仕事ね」
 「…また、「ウヒ様と一緒に出かけられたのですね」「図書室に行つていただけよ」「探しに行かせましたが、侍女たちは見つからないと戻つてきましたわ」「本を探していた時だったのよ、きっと」「明りを消して、ですか？」

ばれている。

エンジュは、唇をかみしめた。禁書庫に入つたことだけは、知られるとまずい。

「じゃあ、休憩に外に出ていたのよ」

「コウヒ様がいらしてから、姫はかわりましたわ」
以前は、嘘をついたりはなさらなかつた…。

その言葉にエンジュは、オノセを睨みつけた。

「オノセは、コウヒが嫌いだものね」

「そんなことを申し上げてこのではありますん」

「じゃあ、何なの」

「の方は、」

そこまで言って、はっとオノセは息をのみこんだ。

エンジュには彼女が言葉をのみこんだ理由を知っていた。知つていたから、不機嫌に別の話題をふる。

「私たち、今にここで埃にまみれて、死んでしまうわ。何もすることができなくつてね」

「そんなことはありませんわ」

オノセは囁んで含めるように続ける。

「美しく整えられていますもの、お部屋も調度も」
かみ合わない言葉に、お手上げだと、エンジュは天井を睨んでため息をこぼした。

確かに、この邸も部屋も豪奢で美しい。

父の権勢があまねく国中から、一級品ばかりを集めているのだから。

「あなたは、美しいものに囲まれていたら、満足なのでしょう」

滑らかな漆塗りの文机、瀟洒な紋様が施された椅子、天井から掛

け下ろされた濃い藍絹や薄衣。

身の周りの物は、オノセの趣味で選ばれている。

「まあ、美しいものが一番じゃありませんか。他に、どんな基準がおありだと？」

美しく整えた眉をあげて当然のよう、「ひ返されれば、返事のしようもない。

「男に生まれたかったわ」

エンジュはむつりと文句を言つ。

「なんてことを。お父君がどれほどあなたに贅沢を許しておいでか、存じでしょ！」

オノセは首を振る。

紅や絹に人生のすべてを奉げているとも云ふ彼女には、到底信じがたい言葉なのだ。

「兄君のよう、ここを出たい」

口から出たら、その言葉は真実味を帯びた。

「エンジュ様」

制止の声は、彼女を勢いづけただけだった。

「兄君のように外を見たい。兄君のように学校へ行きたい。兄君のようにたくさんの方達に囲まれてみたい。

兄君のように買い物をしたり、いたずらをして宿舎の罰掃除をしたり、ひそり規則を破つて外出したり、…」

言つているうちに、苛々としてきた。

「エンジュ様、駄々っ子のようですわ。おやめあそばせ」「オノセはふう、と額を押されてため息をつく。

「ウォン様からいつたい何をお聞きになつたのです」

ひとしきり地団太を踏むとエンジュは、大きな声で言い募つた自

分が情けなくなつて、あーあと肩を落とした。

4つ年上の兄君は、学問の中心地・朱都^{シユト}で、貴族の子弟たちが通う学府『緋の学院』に入っている。

長期の休みで、年に数度、この都の本邸へ戻つてくる以外は、会うこともない。

帝の傍で、宰相という重責を務める父君とは違い、肩の力の抜き方を十二分に心得た兄は青家嫡男でありながら、問題児でもあるらしい。

時折思い出したように妹に届けられる便りは、学院で起こした騒動で埋められている。

ちょっとした暇つぶしにと、と風をつかまえる方法を教えてくれたのも彼だった。

『こうやって、生氣^{イキ}を送るんだ。ほら、やつて、いらっしゃる、』

ちょうど乗ってきた春風をつかまえて、いたずらっぽく兄は言つた。

体が丈夫でないと侍医に云われ、年中、邸の中で過ごす妹を彼なりに気遣つっていたのだろう。

エンジュが見よう見まねに、風に息を送ると、彼はひゅう、と口笛をふいた。

『こりや、すい。生きてるみたいだ』

兄が送った息は、風をのばしたり、大きくしてただ戯れるだけだが、彼女が教えられたようにやると、まるで感情をもつた生き物のように風は声を伴い、その思いさえ伝える存在へと転化した。

青いほのおに変わつた春風は、その光の奥に、黄色い花畠で花をつみどる女たちを映した。

粗末な無地の衣と日よけの頭巾をかぶつた平民たち。日々の糧を

得るための、荒れた手。

その周りを飛び交う、ちゅうちゅ、ちゅうちゅ、ちゅうちゅ。

そして、見渡す限りの黄色い花。

「ああ、この花は何と云つただらう。へるへると回つて、きれいだつた。

青い抜けるような空。ああ、明るい。はじめて、見た。もつと、もつと、もつと。

興奮にぼう、となつて、『エンジュ』の手を握り、兄は風を解放させる呪文を唱えたが彼女の呼氣で縛られた風は、変化しなかつた。

『強すぎまる、』

と彼は小さく舌打ちをしてから、自分の指先を歯で噛み、血を餌に風を元の姿に戻してから、言った。

『いいか、エンジュ』その声は、低く憂いの響きを含んでいた。
『絶対にその力、あいつに知られてはいけない。絶対にだ』

「あいつ、って誰だつたのかしら？」

エンジュは口の中で、咳く。

あの日以来、兄の彼女に対する態度が変化したように思つ。

以前と同様、軽い口調と穏やかな物腰、からかう様な仕草は変わらなかつたが、時折、困惑にも似た表情がよぎることがあつた。

その理由を問いたいと彼女は思つ。しかし、まだ今年は兄の帰省が許されていない。

「…エンジュ様、お聞きですか」

彼女は、意識をオノセに戻した。

「何、オノセ」

「お召し替えのお時間に」「わざわざ、本日せうじ御用に」「挨拶なさる
予定です」

エンジュは内心で、重いため息をついた。

オノセが5本爪の龍が縫いとられた蒼のとばりをまきあげ、控えの部屋に彼女を通す。

香炉からゆるく煙がくゆり、侍女たちが反対の部屋から装飾品や衣を手に入つてくる。

日に3度の召し替え。

人に会つことがあれば、その数だけ着替えの数は、増えた。

地には極彩色で織られた足元までのオーバードレスの上に、胸の下で、幅が指4本程度の太さの帯を巻きつけ結ぶ。これがこの国の女性たちの一般的な装いだ。

改まつた場にでるときは、地の模様がうつる薄物をドレスの上に幾重にも重ねたり、下に織りの違う裾を重ねたりという重ねの色合いを楽しむ衣装が好まれる。エンジューの場合、普段着とは言つても、オーバードレスの上に色みの違う青を2枚も重ねている。

貴婦人たる者、たくさんの重ねを着崩れせず纏い、重さも感じさせないよう、優雅に動くことを求められる。貴族の女性たちの日常と云われれば、仕方のないことなのだが、自室といくつかの部屋の行き来のみが平生のエンジューには、幾度もの着脱は煩わしいことこの上ない。

勿論、オノセをはじめ、彼女に仕える侍女たちは、青家のひとり娘である彼女を華やかに着飾ることが誉れであり、当然であるとの認識がある。

それにしても、衣が重い。

エンジューは、銀の腰帯びを結んでもらいながら、思つた。

身にまとう絹には、全面に錦糸の刺繡が施されているからだ。頭

ももげるほど、重い。

背を覆つ髪は複雑な編み込みで半分ほどが結いあげられ、その上に翡翠玉のついたかんざしを6本差される。

しゃらんしゃらん、と華奢に揺れるかんざしがどれほど重いのか、見ている者は考えたことがあるだらうか。

侍女がオノセに水差しを差しだす。

エンジコが水に浮いた花の中から、青い花の薺を指さすと、オノセが慎重に手に取り髪にさして貰われる。鏡で位置を確認する。

「いいわ、ありがと」

「ほう、と侍女たちがため息をつく。彼女たちのため息は、エンジコのものとは違つ。

賞賛であり、感嘆であり、満足の色なのである。

エンジコは背筋をのばし、頭を揺りながら歩幅を小さくとりながら部屋を出た。

オノセがすぐ後ろを歩いてくるのを承知で、うめき声をあげてみせる。

「服も髪も重い」

「何をおっしゃこます、女は我慢ですわ

」平然と、オノセが返す。

何を言つても無駄な気がしたので、せめて顔つきに不満を浮かべて、エンジコは廊下を歩く。

幾つもの部屋を通り過ぎ、幾つもの角を曲がる。

「もつと、にこやかなお顔をなさいませ」

「気分が悪いのだから、これが精一杯よ」

鼻を鳴らして、エンジコは答える。

蠟燭の炎が紙を通して、明るく足元を照らす。毎回なに、勿体

ないことだ。

夜には、光々と明かりがともる。この明かりの番をするためだけの召使が、邸には十数人もいるのだと、兄君が教えてくれたことがあるのを、エンジュはぼんやり思い出した。

行きかう人々が、脇に控えて頭を下げるなか、エンジュとオノセは、中央を進んでいく。

その時、行く手の角を曲がってこちらへ来るひときわ美々しい女性の一団が目に入った。

エンジュは、オノセに配すると廊下の端へ寄った。

「うわげんよひ、」

一団の中心を進む女性は、エンジュの前で足をとめ、そつけない挨拶を寄こした。

ナルミヤだ。彩模様の扇で顔の大半を覆っているため、表情はほとんど窺えない。

帝の近親にしか許されない黄の綿を幾重にもあわせた衣装。

冠のように飾り玉が額に幾筋も揺れるかんざしは黄金でできており、左側に結いあげた髪は黒く豊かにまとめられている。

白いかんばせは人形のように硬質で若々しく、実際、年齢もリュウカとは姉妹ほどしか離れていない。

美しく整えられた手に持つ扇からは、貴族の女性たちに最も珍重されている百合の香がつん、と匂つた。

エンジュは極めて事務的に膝を軽くおつた。

「うわげんよひ、お母上」

この挨拶に、相手はわずかに険のある眼差しを向けたようだった。

しかしHンジュは氣付かぬふりでオノセを促し、歩を出す。
その背中へ、棘のある言葉が投げかけられる。

「可愛げのない娘だこと」

十一分に離れて次の廊下を曲がつたところへ、Hンジュは長く吐息をついた。

「お母上は、相変わらずね」

「気になさこませんように」

オノセが慰めたが、Hンジュはいつも毎回刺々しく顔を合わせられるのは、避けたいと思つてしまつ。

ナルミヤは父君の最も新しい、かつ唯一の妻だ。

現帝の異腹の妹宮である。妾妃から生まれた皇女としては異例の一品の身分を賜つて青家に降嫁してきた。

この婚姻は先帝の遺言だったとかで、当時くちさがない年配の侍女たちなどは、父君がナルミヤをめとる為に先妻たちを呪い殺したのだ、と噂した。

まだ年若く氣位の高い姫宮と、Hンジュとの親娘関係は、そんなわけで最初から芳しくない。

それでも同じ邸に過ごすようになつて、6年が経とうとしている。

「3週間ぶりだわ」

Hンジュは、オノセに苦々しく呟く。

父君とは、もつと会つていない。ともすると、顔さえ忘れてしまいそうになる。

挨拶の時間を意図的に作りねばならないほど、彼女の家族関係は希薄だ。

父君は、Hンジュだけでなく一人息子の雨音ウォンにも全くと言つていい

いまでも、関心を持つていなことだった。

回廊を出ると、よく磨かれた青石で敷かれた玉砂利が広がる庭園に出た。

青家の本邸は石庭で名高く、雨が降ると琴をはじくような音が響く。

代わりに、花や木など生きたものは配されていない。

都の喧騒のなかにあるとは思えぬほど、硬質で静謐な邸である。

屋根つきの東屋を結ぶようした舗装された小道がゆるやかに延び、エンジュは歩調を落としてオノセに並んだ。

「父君はいつお戻りに?」

エンジュは話しかけた。

「一昨日、どうかがつておりますが

「皇宮から?」

「そのようですね

オノセは答えながら難しい顔つきで、考え方をしてくるようだつた。

「先づい、西家を通じ、和約のための隣国の使者が到着したとか」

「西家?」

ええ、とオノセはうなづく。

西家は、文字通り帝国西部を治める大諸侯だ。

東を治める青家とは同格の『大公』の位を与えられている。

本家である白家は、とうの昔に断絶しており、今はその流れをくむ12の分家が持ち回りで当主の座に就いている。

西と言えば、半島で国境を接するグルジムカである。

屈強な騎馬軍、圧倒的な行軍力で周辺国を脅えさせる、巨大な軍事国家。

長年、帝国とは戦火を交えてきた相手だ。

「和約？」

意外な響きにエンジュは首をかしげた。

積雪のための中斷はあっても、停戦や和約などといった言葉は、好戦的なグルジムカに対して使われたことなどない。

「国境の砦から出撃した我がほうの少數部隊が、奇襲によってグルジムカの騎馬軍を壊滅せしめた、と聞きましたわ」

奇襲。エンジュは確かめるように、くりかえした。

奇襲とは、騎士の風上にもおけぬ策。

その策をとらねばならぬほどの不利な戦であつたといふとか。

エンジュは胸に痛みを覚え、頭一つ分背の高いオノセを見上げた。
「勝ったの？」

エンジュの言葉にオノセは首肯する。

「そのように、うかがつておりますが、」

「和約の条件は？」

エンジュの問いに、オノセはめずらしく逡巡してから口を開いた。

「西家の公女と、グルジムカの王太子の婚姻。および、捕虜の交換」

「…騎士たちが無事でいると良いけれど」

「姫、」

エンジュは、この和約が帝国の実とはならないと直觀した。

勝ち戦でなかつたことも条件を見れば、納得できる。

それでも口に出して、負けた、とは言えない。

オノセが眉根をよせる。

「彼らが無事に帰還する」とを祈りましょ」

一五数十年の長きにわたり、この国の中核政治を牛耳ったのは、
『国首の君』と呼ばれた青家の一族であった。

國を開ざし、和をもつて統治しようとした代々の國首たち。
しかし一百年もたたぬうちに、汚職と暗殺が横行し、内側から腐
つていく果実のように、政情は悪化の一途をたどった。

変革が叫ばれる中、20年前、先代國首は政権を再び、お飾りだ
つた帝のもとへ戻したのだ。

一見落ち着いたかに見える帝国の内実は、内部の瓦解と並行し、
外部からの侵入に悩まされ続けている。

呪術と異能の少数集団で國の根幹を支えてきたが、それもこれ以
上続くかどうか。

特にここ数年は国境があわただしく、西方地域をあずかる白家の
一族は苦しい負担にあえいでいる。

「このままでは、西から帝國は崩壊するでしょうね」

エンジューは、強く言った。

オノセは、慌てて彼女の口をふさぐ。

「し。どこに耳があるかしれません」

「かまつものか。ここにいる私が何ができるところの」

「父君は何と?」

「わたくしには、分かりかねます……ただ、手をこまねいておられる
わけではありますまい」

表で取次をすることも多いオノセは、父君の置かれた政情をおぼろげながら描くことができるのだな。

ため息をつく。

「たとえ今は『宰相の君』とはいえ、総ての権力を手にしているわけではありません。それよりも」

オノセの口調が変化する。

「エンジュ様、幾度も申しあげておりますように、力を使って厄介なことに首をつっこんではいけませんよ」

「厄介なことって?」

「あなたの趣味の、例ののぞき見です」

ずばりと言われ、エンジュは口をとがらせた。

兄君から教えてもらって以降、風をつかまえて外の世界をのぞいていたのをオノセは知っていたらしい。

「迷惑はかけてないわ」

「必要のない力をお使いになることが、迷惑といつのです」

いつもの繰り言だ。

オノセは、どんな簡単な術であってもエンジュが異能を使つ」とを嫌がる。

なぜ、と訊いてもはぐらかされるばかりだ。

エンジュは分かった、と頷き、それきり会話は途絶えた。

しばらく進むと翠の玉で屋根を敷かれた壮大な建物が、姿を現す。

ここは父の居富、すなわち「表」だ。

長く広い大階段を登つくると、侍従が進み出て、オノセに耳打ちする。

階でとめられるなど、普段では考えられない。

エンジュは横目でオノセの表情をうかがつたが、その白い顔に何の色も読めなかつた。

しばらくして二人は奥から出てきた別の侍従の案内で、当主・青龍リュウが私的な応接に使う部屋の前に立つた。

ここからは、エンジュひとりだ。

「父君、エンジュです」

低く応えが返り、エンジュはなかへ入った。
額の前で両手を組み、膝を軽くおり礼をとる。

「やあ、これは大した貴婦人ぶりだね、エンジュ」
明るく、屈託のない若い声を聞いて、彼女はまさか、と顔をあげた。

そこには、1年ぶりに見る兄の姿がある。ゆるく波がかつた髪が肩まで届いているのと、身長がずいぶん伸びたような気がすること以外は、去年のままだ。

彼は長椅子から立ち上がり、にっこりと笑った。

「兄君！」
「ただいま」

彼女は父の部屋だといつことも忘れて、歓声をあげ、兄に抱きついた。

「そんなに歓迎してくれるなんてね、僕も帰ってきたかいがあるつてもんだよ」

と、彼らしい軽口で妹の手を取つて、「ねえ、父上」と振り返つた。

「雨音、
ウオン

冬の朝の池にはつた氷のような聲音で、父君が呼んだ。

彼は、良く磨かれた黒くて立派な卓の前に、座つてゐる。右の脇には、書類の載つた盆を持って書記官が立つ。

エンジュが見慣れた、ここにいつもの風景だ。

「なんですか？」

父の聲音にも、兄は自分のペースを崩さうとはしなかった。

父君は、左の眉をぴくりと動かした。これは、彼が気に入らないときの仕草だ。

Hンジュは、父の叱責を予期して体をこわばらせた。

「下がつていー」

だが、父は息子に対してもなく、側の書記官に静かに言った。
壮年の書記官は頭を禮すると、家族を残して退出した。
彼が出ていくと、兄君はまるで嘘のように笑顔をひっこめ、Hンジュの手をする、と離した。

そうして苦々しげな表情で、長い手足を投げ出すように、椅子に深々と座りこむ。

「さあ、はやく聞かせてくださいよ。なぜ、貴方の前に兄妹揃つて居るのかをね、父上」

「兄君」

Hンジュが雨音に咎める視線を送れば、父が「おや、「とわざとらしく、彼女を見つめた。

初めて、娘がそこにいることに気付いた、とでもいう風に。

父君は静かに、机の上で両手を重ねる。

その左手の中指には、5本爪の龍が彫られた銀細工の指輪がはまっている。青家の当主・青龍のあかしである。

龍の爪に使われているのは、さすように蒼く輝く2対のダイヤモンドだ。

この宝石には特別な力が宿つてゐると云えられ、自ら持ち主を選ぶといつ。

右眼は『氷涙』、左眼は『流呼』と呼ばれている。今は「流呼」が嵌っていない。

父君が最後の国首の座を帝に返還した時、離れたという。エンジュはいつも、田を見ることができなくて、指輪の嵌った父君の美しく女性的な手に視線を落としてしまつ。

父君の声が落ち、エンジュは顔をあげた。

「四宮^{シノヤ}が、神殿より戻ってきた」

青龍は、微笑をうかべている。

不満げに結ばれた兄君の口がぴくりと動いた。

「皇太子が内定したのですか、」

「そうとは言つていない」

「では

」

「確かに彼は、有力だ。お前もいざれ任官しよう。その田で、見た
いかと思つてな」

父君は、造作の良く似た息子に視線を投げる。

背に流れる波立つた髪も、神経質そうな眉も、高く整つた鼻梁も、広い額も、うすく引き結ばれた唇も、兩音が年をとればかく、とばかりの類似。

2人の圧倒的な違いは、ただ体にまとう力の差である。溢れんばかりに立ち昇る父の異能に対して、兄のそれは仄かに体にまとつてゐるに過ぎない。

「いずれ、であつて、今ではありませんよ」「しかし、見極めねばなるまい」

邸の奥からほんと出ることのないエンジュには、一体、父と兄が何を話しているのか、深くは分からなかつた。

不可解な表情が面に浮かんだのだろうか。父君は不意にエンジュに目をとめた。

「ときには、そなた。幾つになつた?」

「…16です」

困惑しながら、こわごわエンジュが答えると、青龍は一瞬、安堵とも苦みともつかない曖昧な表情を浮かべた。

「エンジュの年が、いかがしました?」

兄君が先を制するように父に尋ねる。

父は兄に視線を戻すと、娘の顔も見ずに言つた。

「嫁がせる。ハクオウ白桜家の嫡男だ。そう悪くはあるまい」

「それは、…決定なのですか?」

エンジュの声が自然と震える。

「不満か、」

青龍はエンジュに視線を戻したが、その顔に感情らしきものは浮かんでいない。

彼女は直ぐ首を振つた。

「いえ、ただ…」

しかし、突然のことに、口を開いたはいいが何を話していいのか分からず、結局、もう一度首を振つて黙つた。

「父上、そのようなお話は」

と兄が抗議の声をあげたが、「反論は許さぬ」との父君の一言に押し黙る。

まさに寝耳に水のことだ。

長い沈黙が落ちる。

リュウカは唇をかみしめた。父の考へていることが知れない。

「どのような相手か聞かないのか
しばらくして雨音がエンジューをうながしたが、彼女は直接それは
は答えず、棒のように強張った足を前にすすめ、父君と黒い机を挟
んでむきあつた。

「嫁げば、おのずと知れましよう　父君、」

「何か」

「父君は西家に、いえ、敵国グルジム力に譲歩したのですか」

「父君は西家に、いえ敵国グルジムカに譲歩したのですか」
そのひと言に青龍の表情が一変した、と思つた途端、「ごおつ、と
エンジュの体を黄金の炎が包み、芯からもえあがる激痛が彼女を襲
う。

あつい、あつい、あつい、あつい、あつい、あつい、
もえている！！

「父上！！」

慌てたような兄君の声が聞こえ、ああ、父君がお怒りになつたの
だ、とエンジュは痛みに崩れそうになりながら、思った。
この業火は、父の放つた力だ。

「せいぜい、婚家ではその口のきき方に気をつけるがいい」

父君はそう言い捨てる、椅子から荒々しく立ちあがり、部屋を
出て行つた。

エンジュは父の退出と同時に膝から崩れ落ち、心の臓を焼く熱さ
に床をのたうちまわつたが、けつして悲鳴を上げまいと奥歯をくい
しばる。

田じりから涙がこぼれた。

何分激痛に耐えただろう、次に意識がはつきりしたときには、彼
女はオノセの腕の中にいた。

火は見えない。

ほつと息をつき、ぼんやりと田元をぬぐつと焦点がはつきつし、
オノセの顔が見えた。

二つもの美しい顔が涙で汚れている。

傍らに兄君とコウビの姿もある。

兄君は、口もとをひき結んで感情をこらえてくるようだ。

「…コウビ、来てたの」

声をかけると、赤い目でエンジュを覗き込んだ。

怒りのよくな、悲嘆のような複雑な色が浮かんでいた。

「青龍ちゃんに何をおしゃったのです？」

「父君は、グルジム力に屈したのか、と聞いた」

エンジュは軽く笑つたつもりが、喉の息がひゅうひゅうと鳴つて、あえぎ声のようになってしまった。

体に力を込め、半身を起こすと、びりびりと皮膚にしびるような痛みが走る。

特に、むきだしになつた両の手が痛い。手の甲を確認すると、肌が赤く染まっていた。

鬱血している。

「なんどこうことを、」

コウビは呻き声をあげたが、エンジュは意に介さなかつた。

両手をどちら、低い声でオノセが癒しの呪文を唱えているのをほんやりと聞く。

このあたりで済んで、幸運だった。兄君がかばってくれたのだろう。黙つて膝をついていた爾音に目を向け、エンジュは謝つた。

「兄君、心配をおかけしました」

「全く。寿命が縮んだ」

彼はいつものように、片手でエンジュの頬に軽く触れてくる。鼻に、かすかに腐臭がついた。

エンジュは、まさか、と兄の反対側の袖口をぐい、と引っ張った。布のぬめるような感覚に、やはりと納得する。腕に走る一筋の傷口。まだ、鮮血がにじんでいる。

「血をお使いに？」

「…少しな。お前が気にするほどじゃない」

そうは言つても、手首から肘にかけて伸びた傷では、相当の血を躰つたに違ひなかつた。

兄の青い顔を見ながら、エンジュは「『めんなさい』と再び詫びる。

ただ、知りたいことは知れた。父は、先の西部戦線での大敗、あるいは失策を知つてゐる。

そして、どうやら、グルジム力に讓歩しなければならない状況に追いやられていらうらしいということも。

「すまない、お前の盾にはなれなかつた」

父の力は強大で、到底僕は及ばない、と兩音が静かに言い、エンジュはその声の響きに胸がつかれるような痛みを覚えた。

『血を用いるのは、最終手段です』

神から『えられた異能という恩寵を制御するために、エンジュは幼いころからそう繰り返し、繰り返されてきた。

力を持つた大量の血はまた、邪氣をも呼びよせ、果てには持ち主をのみこんでしまう、と。

勿論、兄君も同様であるはずだ。

辺りには朽ちる寸前の花のよつに甘い匂いが漂い、兄の血を媒介とする術だと知れたが、その他にも、多数の術の残り香が鼻をつく。兄の『声』や『息』では、父の術に太刀打ちできなかつたらしい。雨音は、黙つたままのエンジューに視線を転じた。

「申し訳ございません」

と、オノセがうなだれる。

「お前を責めてはいない」

「ですが、」

「いい、僕が側にいたんだから」

オノセはエンジューの教育係として、この状況に、責任を感じているらしい。

だが、雨音はそれには頓着せず、ふつと嘆息する。

「」の程度ですんで、まだ良かつた

それより聞きたいことがある、と雨音は強い口調で言つた。
オノセは顔を強張らせたまま、頷く。

「…皇帝のことだ。僕は学院から戻つたばかりで情報が不足している」

「神殿から、皇子が戻られたというお話でしょうか?」

「そう。父上は見極めるとおっしゃつておられたが…」

「帝の希望であらせられる、とは聞いたことがありますけれど」

「不可解だ…」

オノセの返事に、うーんと雨音は唸り、顎に手をやつしてしまいく
考え方こんでいる。

そのとき、外から彼を呼ぶ声が聞こえた。

「若、そろそろお時間です」

「分かった。すぐ行く。オノセ、君も来てくれ」

雨音は扉に返し、床に座り込んだままのHンジュに向き直った。
そのおもては、軽薄な普段の調子とは全く異なっていた。

「僕が言ひべきは、一つだ。

父を怒らせるな」

僕ではお前を助けてやれない。

そう言って立ち上ると、Hンジュとコウヒを残したまま、振り
返らずに扉の外へと消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6875y/>

黄昏をとどめて

2011年11月23日20時59分発行